



病の言語

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2010-05-25 キーワード (Ja): 病の言語(言葉), 言語分析・精神病理学, 解釈, こころの様相 キーワード (En): the language of illness, language-analysis, psychopathology, interpretation, the state of mind 作成者: 亀田, 政則 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000494

病の言語

亀田 政則

Notes on the Language of Illness in Flannery O'Connor's *The Enduring Chill* (1958)

Masanori KAMEDA

1. 問いと探求の視点

われわれは日常生活のさまざまな場面で「なにかを言い」、そのように「なにか言うことのなかで」、「なにかをおこなっている」。病む者もまたその例外ではない。彼（女）らは、自らがおかれた存在状況のなかで「なにかを言い」、そのように「言うことのなかで」、自らのこのころの状態を言い述べているのである。そのいみで、病む者が口にする言葉をとおして、われわれは彼（女）のこのころの様相を窺い知る可能性に開かれているといえよう。

この論考では、このような視点に立って、フラナリー・オコナー（Flannery O'Connor, 1925-1964）が *Harper's Bazaar*（vol.91, July, 1958）に発表した短編 *The Enduring Chill*（以下、*EC* と略記）²⁾ に登場する、病んで文筆家としての志なかばにニューヨークから帰郷する青年アズベリー（Asbury Fox）がブロック医師（Dr. Brock）やアズベリーの母と姉（Mary-George）と取り交わす言葉、とくに彼が病に言及するさいの言葉の分析と解釈をとおして、彼のこのころの様相を彫琢したい。

2. オコナーの病と *EC*

EC は、オコナー研究者の横山貞子が

主人公（アズベリー）の年齢は、オコナーが発病した年齢とおなじ25歳に設定してある。この作品で描かれる母親との関係は、看護を受ける作者（オコナー）の自己像の戯画化である。病気から来る自己憐憫を自分に許さず、作品のなかで自分を相対化し、こっけい化している。³⁾

と述べているように、当時のオコナー自身のこのころの様相が色濃く反映されている作品である。ここでは、それゆえ、この作品を著すに至るまでの彼女の生の来歴を手短に触れる必要があろう。

1925年ジョージア州サヴァンナに生を受ける。家族はアメリカ南部では宗教的マイノリティに属するローマ・カトリックであり、彼女は終生その信仰に生きる。（オーソドックスなカトリックの信仰・神学的思索と彼女の作品群とは本質的に不離不可分の関係にあるが、ここでは、この論考の趣旨上、その問題には立ち入らない。）

アイオワ州立大学大学院（Department of English, the Graduate College of the State University of Iowa）⁴⁾ 在学中の1946年、短篇 *Geranium* を *Accent* 誌（vol. VI . Summer）⁵⁾ に掲載して好評を得る。翌年、同大学院から芸術学修士号（Master of Fine Arts）を取得する。ニューヨークのグリニッジ・ビレッジにある芸術家たちのコロニーで作家業務に専念できる特典を得るまでに、彼女の作家としての歩みは順調にスタートしたかにみえたが、1950年サヴァンナに帰省中に体調を崩し、その翌年に「紅斑性狼瘡」と診断される。その後の長い闘病生活ののち、1964年、39歳の若さでその生涯を閉じる。

「紅斑性狼瘡」（*lupus erythematosus*）－*lupus*－はラテン語で「オオカミ」を、*erythematosus* はギリシア語で「赤／紅い」を意味する分詞 *eruthainein* に由来する合成語である。－とは、

最初は（オオカミに）咬まれたような皮膚のびらんを示す用語であった。…医学用語でいう紅斑性狼瘡には慢性と亜急性のものがある。…慢性のものは皮膚病変であるのが特徴であるが、亜急性のものは慢性円盤状期のものよりも臨床的、組織学的により広汎性で急性であるが、表在性で瘢痕を残さずに再

Key words: the language of illness, language-analysis, psychopathology, interpretation, the state of mind.

キーワード：病の言語（言葉）、言語分析・精神病理学、解釈、このころの様相

受付日：2008. 9. 30 受理日：2009. 1. 5

発を繰り返す皮膚病変を特徴とする、全身性あるいは播種状（抗核抗体が認められ、そして、通常主要な臓器組織が侵される）⁶⁾

疾患である。彼女のばあい、亜急性の紅斑性狼瘡のカテゴリーに属する播種状（disseminated lupus）のものと考えられ、症状が臓器だけでなく全身に広がっていったものと見られる。（1941年には父親のエドワードも彼女と同じ病気によって死去している。）

このような難病を患いつつも、オコナーの創作活動は1964年（39歳）に死去するまで、着実に続けられた。⁷⁾ 亡くなる四年前にオコナーと文学について対話したダナー（Robert Donner）は、そのような彼女の当時のようすをつぎのように記している。

彼女が私に自分の病気のことをくわしく説明してくれたときの声には、意外にもじつにドライで、自己憐憫の痕跡さえなかった。私は病気が、もちろんのことだが、彼女の（身体の）動きを制限している一方で、それが彼女を一つの場所にとどめ置くものではないということが分かった。（When she was describing her illness to me, her tone was remarkably matter-of-fact, without a trace of self-pity. And I discovered that, while the disease naturally limits her movements, it hasn't kept her rooted to one spot.）⁸⁾

ECは、その病が確実に進行し、コーチゾンを中心とする治療を受けながら1958年に著した作品であり、横山が指摘していることはまさにその当時のオコナー自身が反映しているばかりではない。読者にとっては、アナロジカルなイメージにおいて、病む者のこころの様相を窺ううえで興味深い素材を提供する作品といえよう。

3. オコナーはフィクションというものをどのように考えたのか。

Conversation with Flannery O'Connor. (2005)⁹⁾ のなかで、オコナーは「物語を書くことは、より正確に言えば、自己認識の方法であり」（...in one way, writing a story is a kind of self-knowledge, really.）¹⁰⁾ 「すべてのフィクションは人間の本質について述べるものである」（All fiction is about human nature.）¹¹⁾ と語っている。さらに芸術としてのフィクションについて、

芸術の基底にあるものは、（それが取り扱う）事柄と方法とにおける真実である。芸術を自らの作品のなかに志す者は、想像的なイメージにおいて、真実を獲得しようと志す者である。（The basis of art is truth, both in matter and mode. The Person who aims

after art in his work aims after truth, in an imaginative sense.）¹³⁾

と述べている。

「想像的なイメージにおいて」（in imaginative sense）とは、フィクションというものが、われわれがふだん言う「現実」というものから独立して存在する世界であることを意味するものではない。フィクションとは、論理的に矛盾するものでなければ、われわれが直面するかもしれない、あるいはそうでありえたかもしれないという可能世界（possible worlds）における真実（truth）を開拓するばかりではなく、われわれがふだん「現実」として慣れ親しんでいる世界の意味を再吟味するための鏡ともいえよう。そのイメージで、フィクションを「書くこと」は人間の真摯な生の営みのひとつであるといえよう。このことは、EC—たとえそれがコミカルなものであるとしても—においても然りである。¹⁴⁾

4. ECにおける病にかんするアズベリーの言葉が意味するもの：言語学や精神医学の視点からアズベリーの言葉を分析・解釈することによって、彼のこころの様相はどのように彫琢されてくるのか？

4. 1 アズベリーの病気の解釈とそれによって浮かび上がってくる真相

ECは、「原因のわからない病気で帰郷した主人公の青年（アズベリー：「燃え尽きた灰」のようなものという名）¹⁵⁾ が、自分は夭折する芸術家として死ぬものだとは決まっていたのに、じつは単純な病気だったとわかる話」¹⁶⁾ であるが、結末で主人公が死んだと読む読者が多かった。そんなわけでオコナーは、1960年1月28日、セシル・ドーキンス宛の手紙のなかで、

（この作品）の結末は、とりわけ、最近それを読んで、結末のところでアズベリーが死んだと解釈した読者がいたように、いぜんとして私の懸念とするところです。鳥（聖霊の象徴）が舞い降り始めたので、その読者はアズベリーが（天に）昇ってゆくのだと思われたのでしょう。（“The end of “The Enduring Chill” also still worries me, particularly as someone who read it recently thought that Asbury died in the end. Because the bird began to move down, the person seemed to think Asbury started to move up.”）¹⁷⁾

と書いている。

オコナーの研究者ブリザック（Gneviève Brisac）もまた、オコナー自身の意図に反して、アズベリーは死んだ

ものと解釈している。¹⁸⁾ プリザックの混乱は、テキスト結末部のメタフォリカルな表現が解釈上の困難さを孕んでいるということに由来する。それゆえ、横山は言う。「オコナーの死後にこの作品を読んで、作者の死に引きつけた読みをしてしまう場合はあるだろう」と。「だが、こういう読みは発表当時からあったのだ」¹⁹⁾と。

テキストを読みすすめてゆくにつれて判明することだが、血液検査の結果、アズベリーは地元のブロック医師のいう *undulant fever*,²⁰⁾ すなわち「ブルセラ菌感染症」(*brucellosis*) – *brucell-* は、このバクテリアの存在を特定したスコットランド人医師、David Bruce (1855-1931) の「姓」に由来し、接尾辞の – *osis* は、「病理学的状態あるいはプロセス」を意味している – に罹患していることが判明する。²¹⁾ それは、いっばんに、

ブルセラ属の細菌によって起こる伝染病で、発熱、発汗、衰弱、睾丸炎、鈍痛そして体の「特定箇所の」痛みを特徴とする」(...characterized by fever, sweating, weakness, orchitis, aches, and pains...).²²⁾ 「寄生性で、すべての動物組織に侵入し、ヒトおよび家畜に対して病原性を示す。²³⁾ …罹患動物との接触や菌が寄生した肉、ミルク、チーズの摂取によってヒトに感染する。とくに獣医、農夫、屠殺場従業員にとって危険であり、慢性で長期にわたる疾病をもたらすことがある。²⁴⁾

といわれている。テキストでは、アズベリーの症状について

「一晩中寒気を感じていた。それからシートがぐっしょり濡れるほどのひどい汗をかいた。…体のほうほうで起こったり消えたりする鈍痛、それから頭痛がつづいていた。」(...he had a chill one night, followed by a violent sweat that left the sheets soaking,...there had been a gradual slackening of his energy and vague inconsistent aches and headaches.)²⁵⁾

と述べられているが、それはまさしくブルセラ菌による感染症状にほかならない。原因といえば、それは一昨年前に遡る。アズベリーが黒人のことを戯曲に書いていたさい、彼らが自身の置かれている状況をじっさいどのように感じているかを知るために、母親の農場で働いていた二人の黒人モーガンとランダルに近づいたことがあった。そのさい、彼は、母が禁じていた搾乳室での喫煙から始まり、搾乳したてのミルクを二人が制止するのも聞き入れず、「高揚感にかられて」(*inspired*)²⁶⁾ 飲み干したのであった。²⁷⁾

しかしながら、彼の病状のすべてはそのような外的要因によって説明しきれるものではないことは、彼自身が「言うこと」に注目すれば明らかである。その彼が、

(母親に向かって)「病気なんだよ。熱があつて悪寒がするし、目眩がする。あんたにしてもらいたいのは、ほっといてくれることさ。」(I'm ill. I have fever and chills and I'm dizzy and all I want you to do is to leave me alone.)²⁸⁾ 「死にかけてるんだ。」('I am dying.')29) 「もう死ぬんだよ。」('I'm about to die.')30)

などと繰り返し繰り返し言うとき、主語の *I* は身体や精神という二元論に還元されない *holistic* な存在、医学的にいえば全体観的治療を求める対象である。その *I*、すなわちアズベリーはブルセラ菌感染症に罹患していることも知らず、死の想念と思い込みに取り憑かれているのである (He was convinced that the end was approaching...³¹⁾).

彼は老人のように生気がない (He looks a hundred years old.³²⁾). ブロック医師の往診の数日後に、

「その後何日か、病状は急速に悪化したが、頭のほうは恐ろしいほど明晰にはたらいだ。死を間近にひかえて、ものごとの意味がくっきりとわかるような精神状態になっていた。」(In the next few days, though he grew rapidly worse, his mind functioned with a terrible clarity. On the point of death, he found himself existing in a state of illumination that was totally out of keeping with the kind of talk he had listen to from his mother.)³³⁾

と彼が思うことも、思い込みの範疇を出ない。そのようななかで彼は思う。

もう自分はニューヨークで死んだのであって、肉体の死がくるまで家で過ごす時間にいつまで耐えられるのかが問題である (So far as he was concerned he had died there [New York], and the question now was how long he could stand to linger here.³⁴⁾). 終わりがくるのを早めることもできたであろうが、自殺は勝利ではあるまい。死は道理にかなったこと、正当なこと、人生からの贈り物としておとずれてくる。それが自分の最大の勝利だ。それに、対面を重んじる近所の人たちからは、息子の自殺は母親の育てかたの失敗と受け取られるだろう。とすれば、自殺せずに自然死を待てば、おかげで母は世間に対して顔をつぶさずにすむ (He could have hastened his end but suicide would not have been a victory. Death was coming to him legitimately, as a justification, as a gift from life. That was his greatest triumph...³⁵⁾).

このアズベリーの独白は、もちろんのこと、開悟にもとづくものではない。真意は、それを正反対に解釈すれば明らかになる。独白は自己に対する憐憫の域を出るものでない。

4.2 アズベリーの言葉にある音節 (tonic syllable) ・ 音調 (intonation/accnt) を考察することによって、彼のこころの様相はどのように浮かび上がってくるのだろうか？

では、その彼がたびたび繰り返す言葉

- (1) “I’m ill. I have fever and chills and I’m dizzy and all I want you to do is to leave me alone.” (病気なんだよ、熱があつて悪寒がするし、目眩がする、あんたにしてもらいたいの、ほっといてくれってことさ。)
- (2) “I am dying.” (死にかけてるんだ。)
- (3) “I’m about to die.” (もう死ぬんだよ。)

はどのように解釈すればよいであろうか。

音節 (tonic syllable)³⁶⁾ に着目してみると (以下では、// は音節グループの境界 (tone group boundaries), ^ は黙音部分 (silent ictus) を、大文字表記は強勢部分を示す)、アズベリーの言葉は、

(1-1) //I’m ^ Ill// //I have ^ FEver ^ and ^ CHills ^ and ^ I’m ^ DIzzy ^ and ^ All ^ I want you to DO is ^ to LEAve ^ me ^ ALOne//

(2-1) //I’m ^ DYINg//

(3-1) //I’m ^ ABOut/ to DIE//

というように分析可能であろう。

(1)~(3)を通じて明らかなのは、人称直示語 (person deixis)³⁷⁾ の I の使用頻度が高いこと、そしてその語が強勢発音されていることである。このことから、アズベリーの自己主張と病にかんする独断的確信 (思い込み) の強さが窺い知れよう。くわえて (1-1) All ^ I want you to DO is ^ to LEAve ^ me ^ ALOne// における音調分析からは、アズベリーの言葉には他者の拒絶、あるいは彼自身の自閉的なこころの状態が入り混じっていることが推察できよう。

4.3 プラグマティックス (Pragmatics) の視点から見えてくるアズベリーのこころの様相

例えば前掲の(2) “I am dying.” を、プラグマティックスの視点から、believe や assure などといった心理的述語 (psychological predicative) を用いた以下のような文に翻訳することによって、アズベリーの言っていること

がいかに自己主張的で独断的確信 (assertive/ creditive discourse)³⁸⁾ に満ちているかを窺い知る契機となるであろう。

(2-3) “I believe that I’m going to die”. (believe という信念動詞は、“to feel certain that something is true” という意味であり、“I feel certain that I’m going to die”. という文にも翻訳可能である。)

(2-4) “I assure that I’m going to die”. (assure という信念動詞は、“to think that what one is going to die is true but without having proof of that” ということを意味し、“I think that what I’m going to die is true without having proof of that”. という文にも翻訳可能である。)

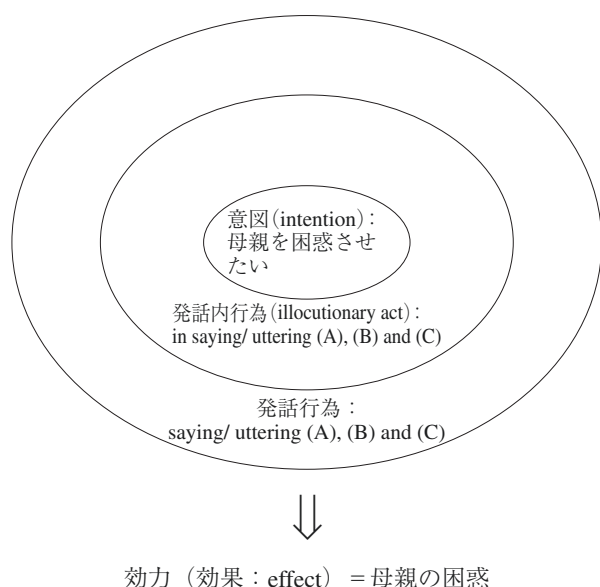
そればかりではない。アズベリーは病床にあって (発話状況: speech condition), (1)~(3)のように「言い」 (発話行為: locutionary act), またそのように言うことのかなで (発話内行為: illocutionary act), 「母親を当惑させたい」という発話内効力 (illocutionary force)³⁹⁾ を意図していることはあきらかである。発話内効力は、1. O のなかで言及したように、「なにかを言い」 (saying/ uttering *p* =locutionary act), 「そのようになにか言うことのかなで」 (in saying/ uttering *p* =illocutionary act), 「ある効力を意図している」 (in saying/ uttering *p*, intending *q* is to be effective) という型式をもつが、以下にある(A)~(C)の言葉、

(A) (アズベリーが地元の医師ブロック氏に診察してもらうよう提案したさいに、母親に言い返した言葉) 「おれの病気はブロックの手には負えないんだ。」 (“What wrong with me,” he repeated, “is way beyond Block.”)⁴⁰⁾

(B) 「母さん、こころの準備をしておいたほうがいいよ。ブロックみたいなやぶ医者でも、本当のことはわかっているんだ。母さんにはまだ言ってないだけさ。」 (Mother, you ought to be prepared. I think even Block knows and hasn’t told you yet.)⁴¹⁾

(C) 「母さん、俺は死ぬんだよ。…」 (“Mother, I AM going to die,” and he tried to make each word like a hammer blow on top of her head.)⁴²⁾

をアズベリーが発話することによって意図される効力に至るまでのプロセスを図式化すると、次のようになろう。



発話の状況 (speech condition): 病床 (アズベリーの心身状態や家族関係を含む.)

4. 4 精神医学の視点から見てくるアズベリーのこころの様相

姉のメアリ・ジョージがアズベリーの病気はたんに心身的なものであり、書く才能がないので病気になるという非難は (what's wrong with him is purely psychosomatic. ...Asbury can't write so he gets sick.)⁴³⁾「ある意味で正しい」 (in a sense she is right).⁴⁴⁾ プルセラ感染症は、たしかにアズベリーが陥っている病的状態の根底にあるが、彼のこころの様相を理解するためには、それだけでは足りないからである。

アズベリーには、クラウス (Alfred Kraus)⁴⁵⁾ の実存分析と役割分析の視点からすると、自己 (the self) と自己の役割 (role performance) との過剰なまでの同一化がみられ、それが彼自身を押しつぶしていると思われる。このことを裏付けるのは、彼がニューヨークにいた自分に、母に宛てて書いた「遺書めいたノート」である。

僕には想像力がない。才能もない。創作できない。あるのはそういったものへの渴望だけです。(訳文調整) なぜ母さんは、そういった渴望もいっしょに殺さなかったのですか? 女よ、なぜ僕を飛ばないようにしたのか? ("I have no imagination. I have no talent. I can't create. I have nothing but the desire for these things. Why didn't kill you that too? Woman, why did you pinion me?")⁴⁶⁾

「遺書めいたノート」に書かれてあることが示しているように、彼が彼自身に作家としての役割がもはや期待できない、もしくはその役割を喪失してしまうと、それがすなわち自己の喪失になっている。このことが意味す

るものは、自己と自己の役割の間にある現実的距離感に乏しく、人生に対してインマチュアなアズベリーの姿である。それゆえ彼の作家としての役割を超えたところに、自己を見いだすことができないのである。(あるいは、つぎのように解釈することもできよう。総じて彼は融通のきかない生真面目な人間である。彼の言葉にはヒューモアがなく、自己戯画化 (*Selbstironie*: self-irony, a caricature of the self) する力にも乏しいがゆえに、自己客観視がうまくできないように思われる。⁴⁷⁾)

さらに一連のアズベリーの言動からは、彼と母親との「母子分離」がスムーズにおこなわれなかったことが判明する。彼は、自分の不完全性 (人格の未熟性) をみとめない。そして心理的には母に依存しているにもかかわらず、問題があると自分自身にぶつけず、依存対象としての母を攻撃的するといった具合に、「一貫した自己同一性も欠如している」。⁴⁸⁾

このようなこころの様相に佇むアズベリーは、「このまま死んでゆくことに」焦燥感を抱く。彼は、「自分のためになにか意味のある体験を最後にしなくては、死ぬにも死にきれない」 (he grew more and more frantic for fear he would die without making some last meaningful experience for himself.)⁴⁹⁾ と思うのである。だが、彼の思い込みのすべては、彼が自身の周りに「病」という名で築き上げた自閉的世界のすべては、ブロック医師の「血液は嘘をつかないよ」 (blood doesn't lie.)⁵⁰⁾ という「たった一言」によってひっくり返る。

5. 結 語

病む者が用いる言葉や話す言葉 (the use of language and speech) は、彼もしくは彼女のこころの様相を垣間見るための鍵であり窓でもある。⁵¹⁾ 病む者の言葉は、しかしながら、自身のこころの様相を微妙にかつ繊細に呈示するのであって、通り一遍の医療英語やマニュアル化された臨床英会話のレベルで対応できるほどに簡単なものではない。そのいみで EC のようなストーリーを読むことは、微妙にかつ繊細な患者のこころの様相を感知するためのよきトレーニングとなろう。医療英語を習得するにあたっての「文学の効用」がここにある。

注

- 1) この論考は、日本キリスト教文教会東北支部総会 (仙台青年文化センター・2006年11月17日) において「病と言語: Flannery O'Connor, *The Enduring Chill* (1958) における『病の言説』の意味論」という題目のもとに発表された原稿に加筆・補正したものである。

- 2) 横山貞子訳「長引く悪寒」『フラナリー・オコナー全短編』下巻所収, 筑摩書房, 2005年, 97-136頁所収. この論考では, *The Complete Stories of Flannery O'Connor*, Faber and Faber: London, 1990. を用い, 必要に応じて横山訳を参照・引用する. 以下, 原典は *EC*, 横山訳は *JT* と略記する. 日本語訳を明記していないものはすべて筆者による試訳である.
- 3) 同375頁.
- 4) *The Complete Stories of Flannery O'Connor*, vii (Introduction).
- 5) *Ibid.*, p.551 (Notes).
- 6) *Stedman's Medical Dictionary*, 28th edition, New York and London: Lippincott Williams & Wilkins, 2006, p.1124. (*JT*, 4th, p.993).
- 7) 年譜は, 前掲『フラナリー・オコナー全短編』下巻367-372頁所収に依拠する.
- 8) *She Writes Powerful Fiction* (Robert Donner) *September*, 1960, p.47.
- 9) Magee RM. ed. (2005) *Conversation with Flannery O'Connor*. Jackson and London: University Press of Mississippi.
- 10) Galley Proof: A Good Man Is Hard to Find, Harvey (Breit, 1955), *Conversation with Flannery O'Connor*, p.9.
- 11) Moteley Special: Interview with Flannery O'Connor, (The Motley, 1958), *Conversation with Flannery O'Connor*, p.15.
- 12) *Ibid.*, p.67.
- 13) Flannery O'Connor, *The Nature and Aim of Fiction in Mystery and Manners: Occasional Prose*. (Sally and Robert Fitzgerald S and Fitzgerald R eds) Farrar, Straus & Giroux: New York, 1970, p.65.
- 14) フィクションと真実性の問題にかんしては, 拙稿「言語・存在・記憶 - Language, Being Memory: A Dialogue with Paul Auster's *In the Country of the Last Things* (1987)」『福島県立医科大学看護学部紀要』2003年, 1-29頁を参照されたい.
- 15) G・ブリザック「フラナリー・オコナー: 楽園からの追放」(Gnèviève Brisac, *Lion du Paradis, Flannery O'Connor*, Editions Gallimard, 1991.) 香川由利子訳, 筑摩書房, 1999年, 66頁.
- 16) 『長引く悪寒』訳者あとがき」横山貞子訳『フラナリー・オコナー全短編』下巻375頁.
- 17) *To Cecil Dawkins*, 28 January, 1960, *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*. (Fitzgerald S ed) Farrar, Straus and Giroux: New York, 1979, p.372.
- 18) Gnèviève Brisac, *Lion du Paradis, Flannery O'Connor*, Editions Gallimard, 1991. (香川由利子訳『楽園からの追放』筑摩書房, 1999年, 74頁.)
- 19) 前掲「訳者あとがき」375頁.
- 20) *EC*, p.381 (*JT*, p.135).
- 21) *EC*, p.358.
- 22) *Stedman's Medical Dictionary*. 2006, pp.272-273. 日本語訳 (*JT*, p.245) は「発熱, 悪寒, 衰弱, 疼痛を特徴とする」とあるのみで, 原文を忠実に踏襲するものではない.
- 23) *Stedman's Medical Dictionary*. 2006, p.272 (*JT*, p.244).
- 24) *Ibid.*, p.273 (*JT*, p.245).
- 25) *EC*, p.358 (*JT*, pp.98-99).
- 26) *EC*, p.369 (*JT*, p.115).
- 27) *EC*, p.369 (*JT*, p.115).
- 28) *EC*, p.361.
- 29) *EC*, p.372, 376, 378, 379.
- 30) *EC*, p.378, 380.
- 31) *EC*, p.377.
- 32) *EC*, p.363.
- 33) *EC*, p.367 (*JT*, p.113).
- 34) *EC*, p.370 (*JT*, p.117).
- 35) *EC*, p.370 (*JT*, p.117).
- 36) Brown G and Yule G. (1998) *Discourse Analysis*, Cambridge University Press: Cambridge, p.156ff.
- 37) Jaszczolt KM. (2002) *Semantic and Pragmatics: Meaning in Language and Discourse*, Longman: London, pp.191-206.
- 38) Leech G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman: London, p.199f.
- 39) Jaszczolt KM. (2002), pp.294-311.
- 40) *EC*, p.360, 367 (*JT*, p.101, 102).
- 41) *EC*, p.372 (*JT*, p.121).
- 42) *EC*, p.372 (*JT*, p.121).
- 43) *EC*, p.373.
- 44) *EC*, p.373.
- 45) Alfred Kraus A. (1977) *Sozialverhalten und Psychose Manisch-Depressiver: Eine existenz-und rollenanalytische Untersuchung*, Ferdinand Enke Verlag: Stuttgart. (岡本進訳『躁うつ病と対人行動 - 実存分析と役割分析』みすず書房, 1983年) 45頁.
- 46) *EC*, p.364 (*JT*, p.104).
- 47) *JT*, p.64. *Langenscheidt's Condensed Muret-Sanders German Dictionary*. Berlin and Munich: Hodder and Stoughton, 1982, p.972.
- 48) 「境界例の診断基準」『精神科 MOOK』金原出版: 東京, No.4. 1983年, 82頁.
- 49) *EC*, p.378 (*JT*, p.130) : "There was something he was searching for, something that he felt he must have, some last significant culminating experience that he must make for himself before he died- make for himself out of his own intelligence" (p.378). "He knew now there would be no significant experience before he died" (*EC*, p.380).
- 50) *EC*, p.367, 381.
- 51) Scovel T. (1998). *Psycholinguistics*. Oxford Univ. Press. pp.3-25.